



はせ おおのき かさつき
初瀬街道の大仰宿と笠着地蔵

市一志庁舎から県道久居美杉線を西に向かい一志町大仰地内に入ると、左手に分かれ民家が並ぶ道があります。その道が、青山峠を越えて伊勢国と大和国を結ぶ参詣道として親しまれた初瀬街道です。かつて旅籠が建ち並んでいたこの辺りは大仰宿と呼ばれ、現在その面影は薄れているものの、お伊勢参りの隆盛により江戸時代後半から明治時代初め頃まで、街道を行き交う人々でにぎわったそうです。

この大仰宿を白山方面へ進むと、右手に雲出川に架かる大仰橋が見えてきます。現在の大仰橋は昭和30年に建設されたもので、明治時代初め頃までは、今より200mほど下流の川向かいにある天明3(1783)年と刻まれた常夜灯の辺りへ架けられていました。この橋は、江戸時代に津藩の許しを得た地元の十数戸で組織された橋組によって維持管理が行われ、橋を渡る人々から橋銭を徴収していました。平成9年には、常夜灯の隣に「大仰有料橋跡」と書かれた記念碑が建てられています。



常夜灯と記念碑

大仰橋を渡り、街道をしばらく進むと右手に天台真盛宗の開祖真盛上人が生まれたと伝えられる場所に建てられた誕生寺が見えます。この辺りから街道と雲出川との距離が近くなっており、穏やかな川辺の景色を眺めながら歩くことができます。本居宣長が書き記した紀行文「菅笠日記」にはこの辺りについての記述があり、明和9(1772)年3月5日の早朝、吉野に向かうため松坂(現在の松阪市)をたち、その日のうちにこの道を通った際に「さて川辺をのぼりゆく

あたりのけしき。いとよし。」と記されています。

そこからさらに歩くと、山裾の崖が街道へと迫り、街道の難所といわれた場所に至ります。その傍らの大岩には、笠着地蔵と呼ばれる約180cmの地蔵菩薩が刻まれています。これは真盛上人が幼少の頃、雲出川に捨てられた際に笠に乗って川をさかのぼり、この淵にたどり着いたという伝説を基に彫られたものだそうです。この笠着地蔵は、地域住民の信心も厚く、街道の道中安全を祈る地蔵とされ、これまで多くの旅人を見守ってきました。

大仰宿から笠着地蔵までは約2.5kmの道のりです。雲出川を渡る涼風を感じながら、ゆっくりと歩いてみてはいかがでしょうか。



笠着地蔵

